

クレッド通信
2018.2

CREDD通信 08

Center for **R**esearch and **E**ducational **D**evelopment

教職員研究会

東京家政大学の内部質保証を考える

P. 4~6



manaba利用の実態
manaba活用事例
P. 10
S. 11



平成30年度FDのすすめ方

学修の充実・向上のために

P. 2~3



学生CRED発足!

次へとつなげていくために

P. 7~9



お知らせ
活動記録2017.04-2018.03
P. 14
S. 15



平成29年度
研究会・講習会実施報告
P. 12
S. 13



お知らせ
2017EVENingファッションショー
P. 16



平成30年度 FDのすすめ方

——— 学修の充実・向上のために

(設置目的)

第2条 学修・教育開発センターは、本学学生の学修の充実・向上に資するべく、学部・学科・科および学内諸部署と協働し、全学の教育活動の改善に向けて組織的かつ継続的に取り組むことを目的とする。

学修・教育開発センター規程より

この設置目的を達成するために、学修・教育開発センターは平成26年4月の設立

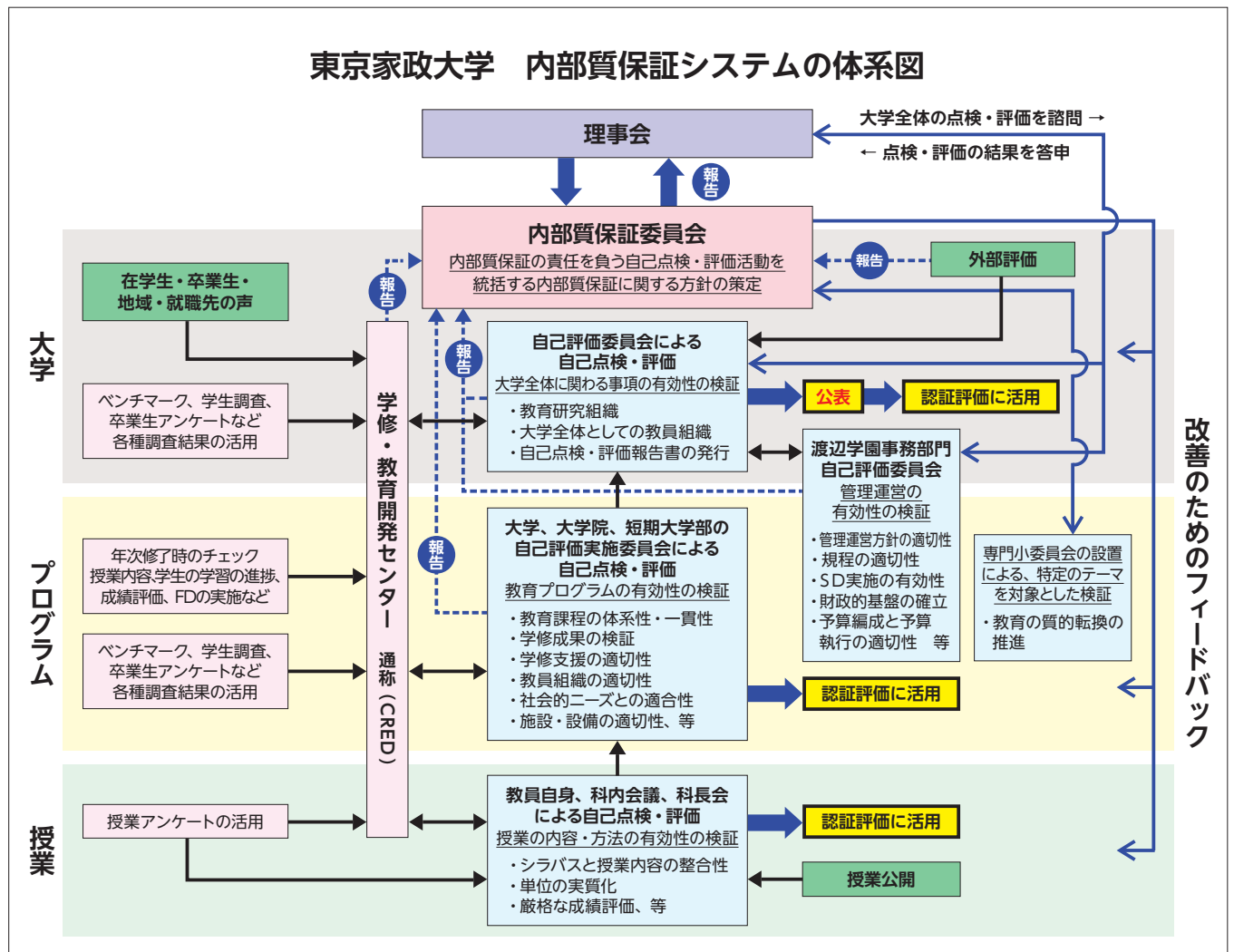
以来、いろいろな業務に取り組んできました。本稿では、センターの業務の一つとして規程第3条の五に明記されているFDに関し、平成30年度における進め方について、学修・教育開発センターからの提案を記します。

FDが求められる背景

2018年は「FDの義務化」から10年目に当たります。義務化の頃には、「FD？ フロッピーディスクのこと？」といった会話の記

憶がありますが、いまやフロッピーディスクは過去の遺物となり、大学関係者の中でFDと言えばファカルティ・ディベロップメントという認識がすっかり定着しています。しかし、FDが何を指すのか、FDの範囲について、大学教員の間で共通認識があるかという心許ありません。

そもそもわが国でファカルティ・ディベロップメントという言葉がはじめて公に使われたのは、大学設置基準の大綱化や大学の自己点検・評価システムの導入を提言し



※大学基準協会による体系図を参考に東京家政大学版を作成

た1991年の大学審議会答申「大学教育の改善について」においてであったと言われています。その後、1998年の「21世紀の大学像答申」などの答申でファカルティ・ディベロップメントへの言及があり、1999年にFD実施の努力義務、そして2008年の義務化へと進むわけです。1990年頃以降の約30年は、進学率の上昇(大学のユニバーサル化)による高等教育の質低下への懸念、1992年の205万人をピークとして18歳人口の急減(2018年には約118万人)、大学に対する説明責任・質保証の要請の高まり(認証評価制度の実施は2004年から)など、大学を巡る環境、社会が大学に求めるものが大きく変わり続けている時代です。2018年現在の大学には、学生と年齢が10歳ほどしか変わらない教員から大綱化以前を知る60代の教員まで、幅広い世代の教員がいます。世代差だけではなく専門の違いも無視できません。FDに対する意識が教員間で大きく違っていても不思議ではありません。本稿では、学修・教育開発センターの業務としてのFDの範囲を確認した上で、平成30年度のFDの進め方を具体的に提案したいと思います。

東京家政大学のFD

文部科学省のホームページ(「FDの定義・内容について」)に以下の記述があります。

FDは一般には広義と狭義の解釈が成り立つ。広義には、広く研究、教育、社会的サービス、管理運営の各側面の機能の開発であり、それらを包括する組織体と教授職の両方の自己点検・評価を含む。狭義のFDは主に諸機能の中の教育に焦点を合わせる。…教育に関するFDは総論的には教育の規範構造、内容(専門教育と教養教育)、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を意味する。

有本章著『大学教授職とFD』
(平成17年 東信堂)

広義のFD、狭義のFDとある中で、学修・教育開発センターはその設置目的に「本学学生の学修の充実・向上に資するべく、学

部・学科・科および学内諸部署と協働し、全学の教育活動の改善に向けて組織的かつ継続的に取り組むこと」とあるように、教育面に焦点を当てた狭義のFDを想定しています。学修・教育開発センターは、これまでつねに「本学学生の学修の充実・向上に資する」ことを念頭に置いて、種々のFD活動を企画・運営してきました。しかし、「学部・学科・科および学内諸部署と協働し、全学の教育活動の改善に向けて組織的かつ継続的に取り組む」ためには、個々の活動の意味や活動間の連関を伝える工夫や努力が少し足りなかったかもしれません。

平成30年度のFDの進め方

平成30年度のFDの進め方について、学修・教育開発センターでは以下のように考えています。

1. 大学のディプロマポリシー(DP)、カリキュラムポリシー(CP)に続き、学部・学科・科のDP(学生が身に付けるべき資質・能力の明確化)およびCP(DPを踏まえた教育課程編成、教育内容・方法の明確化)の策定を支援する。

2. DPとCPの整合を確認するためのカリキュラムマップの作成、科目の順次性・関連性を確認するためのカリキュラムツリーの作成についても、学部・学科・科を支援する。

3. DP、CPにアドミッションポリシー(AP)を加えた3ポリシーは、内部質保証*のPDCAサイクルのPlanに当たる。Doに関して、学修・教育開発センターはとくに学部・学科のCPに関わるDoを支えるために、以下の活動を進める。

- ① 学生の主体的学びや協同的学びを促す授業法に関する研究会や講習会を企画・実施する。
- ② 参加型授業、授業外学修時間を増やす一助としてmanabaの活用促進を図る。
- ③ 学科・科、推進室単位でのシラバスの見直しを支援する。

4. 学部・学科・科、推進室の自己点検・評価(Check)を支援するために、授業アンケート、一年生・三年生調査、達成度アンケート、その他の教学データを集計・分析し、結果を学部・学科、推進室に報告する。データや分析結果等のリクエストに対しても、できるかぎり応える。

5. FDを実質化するために、教員どうし(ときには職員、学生を交えて)「敬意をもって・忌憚なく・建設的に」語り合うことのできる場を設ける。

6. 学科主体FD予算やコンサルティング等を通じて、学部、学科・科・推進室、あるいは個々の教員によるFD活動を支援する。

7. 教職員研究会、リサーチウィークスFDフォーラムは、本学が取り組むべき課題を大学全体で共有するための場として企画し開催する。これらに関しては、原則として全教職員の参加を期待している。このほかの研修は、より具体的な到達目標を設定して提供する。

以上が現時点での計画です。皆さんからのご意見・ご助言もいただきながら、本学学生の学修の充実・向上に資するFDを進めていきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

※ 内部質保証は、「PDCAサイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習その他のサービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセス」と定義されます。参考までに、「東京家政大学の内部質保証システムの体系図」(オリジナルを一部編集)を掲載します。

井上 俊哉(いのうえ しゅんや)

本学心理カウンセリング学科教授(心理統計研究室)、学修・教育開発センター所長。平成3年本学着任 / 研究分野: 教育心理学、心理統計学 / 著書: 『メタ分析入門』(東京大学出版会)、『心理検査法入門』(福村出版)、『心理統計の技法』(福村出版)



教職員研究会

東京家政大学の内部質保証を考える

第1部:平成29年9月1日(金) 14:30~16:30 / 第2部・第3部:平成29年9月4日(月) 13:00~17:20

はじめに

企画にあたって

執筆:安積 和広
学修・教育開発センター

教職員研究会は例年1日(終日)開催でしたが、平成29年度は9月1日(金)と4日(月)の2日に分け、それぞれ半日ずつ開催しました。理由は小講堂が耐震工事のため使用できないという会場の問題と、以前より終日開催では業務に支障あり参加しにくいという意見を考慮したためです。一方、2日間の開催にすると狭山校舎からの移動負担が大きいことへの懸念があり、1日目の基調講演は狭山校舎へライブ中継するようにしました。

企画にあたって重視したのは、プログラム全体に通じるテーマの選定です。学修・教育開発センター内で案を出し合い、検討を重ねました。検討当時(4月~6月)、大学における重要トピックの1つは、今年度は大学の認証評価受審の年であり、内部質保証への取り組みが問われていることでした。ただ、私を含む一般の教職員から見ると、そもそも「内部質保証」とは何なのか、言葉を聞いてもよくわからず、具体的

に何をすれば「質保証」につながるのか、把握することは難しいと感じていました。そこで、まずは大学基準協会が定める基準1~10に準拠し作成した「平成28年度 点検・評価報告書」を教職員全員が読み、大学の現在位置(現状と課題)、将来に向けての取組を理解すること、その上で今後内部質保証にむけて何をすべきか、意見交換を行う場として教職員研究会が良い機会であるという結論に至り、今年度のテーマは「東京家政大学の内部質保証を考える」に決定しました。

第1部 基調講演

同志社大学 山田礼子先生

学生の学修成果を保証するために ~質保証にむけての学修成果測定の動向~

執筆:平山 祐一郎
児童学科、学修・教育開発センター副所長

大学で教育を受けた証は卒業証書です。大学が定めた卒業単位を満たせば、入手することができます。最近では、そのプロセスがやや複雑になってきました。

現在、大学教育の質の保証が問われるようになり、3つのポリシー、すなわち、ディ



プロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)、アドミッション・ポリシー(AP)の整備が全国の大学で進みました。もちろ

ん、東京家政大学でも3ポリシーはすでに定められ、毎年、見直しと改善がなされています。また、平成31年度に予定されている全学的なカリキュラム改革では、この3つのポリシーについても大規模な改定が行われます。

3ポリシーの策定には、理想的には次のようなプロセスを踏みます。まず、DPを定めます。そこでは、大学(学科)を卒業する時点で身につけている能力を表示します。次に、CPを決めます。DPで表明した能力を形成するための教育課程のプラン(趣旨)を示します。最後に、APを決めます。DPを実現するカリキュラムに、応じることのできる人物の特性を記します。これらは受験生や進路指導担当者にとって、重要な判断材料です。

このように3ポリシーがきちんと定められていれば、そのカリキュラムで学修し、単位を取得した学生には、卒業する資格が十分にあると言えます。しかし、DPで約束した能力が「本当に」形成されているか否かは、実際に何らかの方法で確かめてみなければ、わかりません。

そこで、今、「学修成果指標」が目立っています。この指標を作ることは容易ではありません。そこで、今回、同志社大学の山田礼子先生をお迎えして、学修成果測定をめぐる様々な最新の情報を提供していただきました。学修成果測定には、理屈(理論)と証拠(データ)が必要です。しかも、両者とも、一朝一夕に手に入れることはできません。しかし、今回の山田先生のご講演の中から、様々なご示唆や採るべき方向性のご助言をいただきました。心より感謝





申し上げます。

個人的に印象に残りましたのは、教育とその評価のバランスを取る、というお話です。評価に余りに傾倒しすぎると、教育が疎かになりかねません。評価なき教育も成果を上げることにつながりません。山田先生は“optimalに”とおっしゃいました。今後、我々は教育と評価のバランスの「最適化」をはかりながら、学生たちを社会に送り出したいものです。

第2部 教員ワークショップ

平成28年度点検・評価報告書から考える本学の課題

執筆：手嶋尚人
造形表現学科、家政学部長

今回の教職員研究会第2部の教員部門では、家政学部、人文学部、看護学部・子ども学部の3つの部会にわかれ実施された。そして、共通のテーマとして「平成28年度点検・評価報告書から考える本学の課題」が設定され、点検・評価報告書 第4章[1.教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針 2.教育課程・教育内容 3.教育方法 4.成果]の4区分のうち1区分を担当し回答するという事前課題が各教員に出されていた。

当日の研究会の到達目標としては「大学としてのグットプラクティスと課題を整理する」とし、学部ごとの各グループにおいて検討がなされた。学部の状況で、その進め方は多少異なっており、ここでは家政学部での部会について報告する。

家政学部の部会では、2つのワークを行なった。ワークを行なう前提として学士力の中の3.態度と志向性、4.統合的な学習経験と創造的思考力の2つを特に育むことを目的として考えてみることにした。

1つ目のワークIでは、事前課題の担当区分ごとに以下を検討テーマとし、8人以

下のグループに分かれて話し合った。

1.「教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針」グループ

【検討テーマ】

学士力3.4に対応する学部共通の教育目標
—学生に今何が足りないか—

2.「教育課程・教育内容」グループ

【検討テーマ】

学士力3.4を育む教育課程・教育内容
—1,2,3,4年次に必要な授業科目—

3.「教育方法」グループ

【検討テーマ】

学士力3.4を育む教育方法
—時間割内・外、課外活動など—

4.「成果」グループ

【検討テーマ】

学士力3.4の学修成果の測定
—卒業生アンケート、雇用先調査の方法—

なかなか答えの出にくいテーマも有り、グループにより検討の進み具合にかなり差が出たが、第4章についての意識付けは確実になされたと思われる。

2つ目のワークIIでは、ワークIとはメンバーを変えたグループで、共通の検討テーマ「(学科を越えた)自主講座・研究会ほかを企画しよう!—学士力3.4を育み、各学科の持ち味を活かす—とし、ワークIを踏まえた行動計画案を考えるものとした。

短い時間で行動計画案までに至らなかったが、学士力3.4をのばす難しさと重要性。また、既存の自主講座、ドリームプラン、緑苑祭、アートキャンプ、教員企画のシンポジウムなどの活用や他学科との交流、学科の枠を越える企画を実施したいとの積極的な意見が多く出された。

今回の研究会において出された事前課題の回答や研究会当日の意見に、多くの課題そして、その解決の方向性が見出された。これを眠らせず実行していく、そうした環境・場をつくっていくのがこれからの課題と考える。

第2部 職員ワークショップ

新島学園短期大学 学長 岩田雅明先生

平成28年度点検・評価報告書から考える本学の課題

執筆：吉村扶見子
総務部人事課長

平成29年度の教職員研究会<職員の部>は、昨年引き続き本年度より義務化されたSDの一環として、総合的な大学活動を含めた運営改善を目指すための取り組みにつなげるべく進められている。9月1日、9月4日の教職員研究会に先立ち、7月19日のSD説明会において教職員研究会までの「宿題」を提示した。宿題の内容は、平成28年度の「自己点検・評価報告書」を各自、割り当てられた章の記載内容を一読し、大学の課題を見つけ、当日持ち寄ることとした。宿題に対しては、「自己点検・評価報告書」を初めて目にした職員も多く、戸惑いの声も聞かれた。



当日の職員の部は、81名が参加し、新島学園短期大学の岩田雅明学長より、現在の大学を取りまく状況を理解し、優先度の高い課題は何かを考えるための講演ののち、グループワーク・グループ別発表と講評が行われた。各グループでは、持ち寄った担当章を部署の壁を越えて課題を討論し、優先順位をつけ、発表内容をまとめた。講評は、大学運営や自己点検評価に詳しい岩田雅明先生を筆頭に鹿沼行央教育支援センター次長、岩井絹江常務理事、保坂克二総務部部长、村石健司財務部部长から各々端的なコメントがあった。当日のタイトなスケジュールの中で、各自、真剣に取り組む様子は、そのアンケート結果からも顕著である。事前課題・グループワークについ

て90%以上が有意義であったとし、課題の優先順位のつけ方について理解できたとしていることは、概ね今回の研究会の目的は達成できたであろう。

課題の情報共有は、今後の業務に取り組む際の意識を変えることの一端につながるものであると考える。さらに、大学の状況を俯瞰的に考察する機会の一助となっていることは言うまでもない。

今後予定されている年度末のリサーチウィークスの部署別課題対応発表会への期待へとつながったものになったと確信する次第である。

第3部 教職員カフェ兼懇親会

執筆：今留忍
看護学科、看護学部長

今や恒例となっている第三部の教職員カフェは、板橋と狭山キャンパスの教職員が一堂に結集し連携・交流を深める場であり、教育支援の直接の担い手として取り組むべき課題や提示されたお題について語り合う参加型のワークショップでもあります。

例年、教職員研究会は丸1日かけ、長時間に及ぶ第二部のワークショップを終えて、第三部のプログラムに臨むことから、疲労感のもとより、教職員は少なからず負担感があったように思われます。今年度は、半日ずつの2日間に分けられ、さらに第二部は180分から150分に短縮されたことに因るものか、アンケートには、疲労感や負担感に関する記述はありませんでした。「良かった。特に最後のカフェ!!」「教職員と交流ができ、顔と名前を知る貴重な機会である」「板橋の教職員とも交流、話を聞くことができ、充実した時間をもつことがで

きた」「他学科の教員だけでなく、職員と交流することで、授業だけでなく、大学全体として取組むことが見えた」「仲良くなることで、大学全体をよくしたいという気持ちが強くなった」など肯定的な記述が大半を占めていました。少数ではあるものの「得られるものが少ない」「設けなくてもよい」「成果がわかりにくい。見直してもいいと思う」といった否定的な意見はありましたが、和気藹々とした雰囲気のおかげで、“どんな大学にするのか(vision)、どんな要素が必要か(what)”というテーマについて、真剣に意見交換をする様子が見受けられました。記述内容、149名の参加者の様子を勘案すると、連携・交流を深めるという目的は達成できたといえるのではないのでしょうか。

大学教職員の役割、資質能力への要請は大きく変化しています。教職員には、多様でかつ高度な資質能力が求められており、自らの資質能力の向上を図るためには、常に研修に務めなければなりません。今回司会を務め、教職員カフェは、すべての教職員に求められる基本的な資質能力向上を考慮したプログラムとして位置づけられ、教職員を支援する企画であるという見解を明らかにしました。さらに、①学生が入学してよかったと思える大学、②保護者が入学させてよかったと思える大学、③教職員が勤めてよかったと思える大学、④地域住民が在ってよかったと思える大学である、という vision を掲げ、いかにその vision に近づけるか努力することを大切にしていきたいと考えています。

末筆になりましたが、教職員の皆さま、カフェの進行にご協力くださり、心よりお礼申し上げます。

おわりに

全体を通じて & 次回に向けて

執筆：安積 和広
学修・教育開発センター

第一部から第三部の全体を通じての参加者数は278名と昨年の280名と同程度でした。事後のアンケートでは大多数の方が有意義であった、満足できる内容であったという結果が出ており、会の目的は達成できたと感じております。また、教職員のほぼ全員が集まり交流できる貴重な機会であるという意見も多く、本学において欠かせないイベントであることを再認識することができました。開催日程については「2日に分けた開催がよい」と「1日(終日)開催でよい」との回答に大きな差はなかったことから、次年度どのようにするか、改めて検討が必要です。

2日間にわたって開催しましたが、第一部、第二部、第三部の合計研修時間は約6時間です。この中で何かを学び、話し合い、研修で得たことを忘れず今後の活動に活かすところまで目指すとしますと、研修時間は必ずしも十分とは言えません。しかし、貴重な時間を割いて参加して頂いている教職員の皆様にとって少しでも有益な時間を過ごして頂けるよう、今後とも研修の設計(研修目標の明確化と共有、事前課題、プログラム構成、研修後のフォローアップ等)に磨きをかけて次年度に臨みたいと思います。

最後になりましたが、ご参加頂きました皆様、本当にありがとうございました。また、運営にあたって各種方面よりサポートを頂いたこと、心より御礼申し上げます。



学 生 C R E D 発 足 !

学生 CRED は「家政大を、自分たちの学生生活をよりよくするために」という標語を掲げて活動する学生団体です。学修・教育開発センターは、学生 CRED の正式発足（平成29年8月7日の教授会でキャンパス・ボランティア団体として承認されました）以前から、学生たちの活動を見守ってきました。この場を借りて、学生 CRED 設立の経緯を記録しておきたいと思います。

発端は「学生と教職員の交流会」にあります。学修・教育開発センターが発足した平成26年度に第1回を開き、その後も年に一度行っているこの会で、学生から多く聞かれるのは、学生と教職員が交流する機会、他学科の学生や同じ学科の他学年の学生と接する場がもっとあるとよいという声です。また、不満やいろいろな要望も挙がります。こうした要望に対して、当初は教職員側がどう対応するのかということだけを考えていました。しかし、交流会の回を重ねるうちに「学生は注文する人、教職員は注文に応える人でよいのか」、「学生自身にもできることがあるのではないか」という思いも強まりました。そこで、平成28年度の「第3回学生と教職員の交流会」から、企画・運営を学生に委ねることにしたのです。第1回・第2回の交流会のアンケートで「今後企画から関わりたい」と回答してくれていた学生、特待生に呼びかけたところ、5名の学生が応募してくれました。彼女たちは、何回もミーティングを重ねて企画を進めてくれました。学修・教育開発センターからは職員がミーティングに参加して（教員も何回かに一度の割に加わりました）学生たちの相談役になるとともに、学生だけでは難しい部分（参加学生へのポータルでの呼びかけなど）を手伝いました。第3回交流会は12月20日に開かれ、司会やファシリテーターもすべて学生が務めました。参加者の満足度は高く、教職員の方からも「思っていた以上に学生たちは



できるね」という感想をもらうことができました。企画・運営役の学生たちと学修・教育開発センター教職員の初会合（10月20日）の議事メモを読み返したら、「当日の司会（実行委員がやるのはハードルが高い?）」という記述がありました。どうやら心配していたらしいのですが、いまとなっては心配していたことが不思議でなりません。第3回交流会について、教育福祉学科の齊藤さんが企画者を代表して書いてくれた文章が CRED 通信06に掲載されていますので、ぜひご覧ください。

その後、交流会の反省会（平成29年1月20日）で、学修・教育開発センターからの提案を学生が受け入れる形で、交流会企画者のうち4名の学生たちによって学生 CRED が発足しました（学生 CRED という名称は学生たちが提案してくれたものです。命名日は3月7日です）。学修・教育開発センターはFDを担う部署でもあるので、センターのFD業務を手伝ってもらい、いわゆる学生FD団体として発足させてはどうかという意見もありました。しかし、学生の主体性を発揮する機会の創出が第一義だと考えていましたので、教職員から学生に意見や要望は伝えるが、最終的な決定

は学生が行うということを学生と教職員間で合意しました。「学生と教職員の交流会」後の最初の企画は、学生 CRED メンバーが、自分たちが新入生だったときにこういう場がほしかったという思いから生まれた「新入生歓迎交流会」です。「新入生歓迎交流会」は多くの上級生を巻き込んで5月18日に開かれました。各学科の上級生たちが工夫をこらして新入生をもてなした会は参加者に大好評でした。新入生歓迎交流会については、児童学科の平田さんが書いてくれた文章が CRED 通信07に掲載されています。こちらもぜひご一読ください。

学生 CRED 設立までの軌跡を紹介させていただきました。学生 CRED は「第4回学生と教職員の交流会（11月30日）」「第1回クリスマスパーティー（12月21日）」を成功裏に終えて、平成30年2月現在でメンバーは12名です。これからも、学生 CRED および参加学生一人一人の成長を、期待を持って見守り応援していこうと思います。

井上 俊哉（いのうえ しゅんや）

本学心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）、
学修・教育開発センター所長。



第4回

学生と教職員の交流会

2017年11月30日(木) 17:00～18:50 / Cafe Luce^{カフェ ルーチェ} (16号館食堂)

参加者 学生27名、教員13名、職員11名

夏休み後、学生企画委員は2つのチームを作って企画に取り組みました。私達は第4回学生と教職員の交流会チームです。板橋校舎には学科が9個あり、コースや専攻で更に細かく分かれます。同じ校舎に通っていても、学科が異なる学生の事について、知らないことがたくさんありませんか。また、同じ敷地で生活していても、学生と教職員の方がお話をする機会は限られているかもしれません。

そこで、

＊授業の本音を共有する事

＊一週間のスケジュールを共有する事

＊他学科の学生と友達になる事

が出来る会の準備をしました。

交流会の開催に向けて、学部・学科・学年の異なるメンバーがほぼ毎週集まってミーティングをしました。所属が違うので、時間割も課題が忙しい時期もそれぞれ違います。例えば、活動期間中に校外での実習があるメンバーもいました。

実習期間直前まで参加してくれて、実習期間終了と共にすぐ戻ってくれる姿に頭が下がる想いでした。

開催に向けての準備を始めやすく、新企画チームから1人、掛け持ちで入ってくれました。彼女は普段も、会が始まる直前も冷静且つ優しかったです。居てくれるとホッとするメンバーの存在は、当日マイクを持つメンバーにとって支えだったと思います。

また、当日にファシリテーターとして参加してくれた新企画チームのメンバーと、教職員テーブルのファシリテーターを務めてくださった教職員の方々の協力もあり、会を進行することが出来ました。

マイクは司会担当の2名とアイスブレイク担当の2名が交代で持ちました。

話し合うグループは6つに分かれました。マッチングゲームの時に企画委員が一時不在になるグループがあります。参加者3人でお迎えに行くことを開会直前に承諾して

プログラム

17:00 開会

17:10 学生間交流、教職員間交流

【学生間交流】

・アイスブレイク

・週間スケジュールの共有

【教職員間交流】

・週間スケジュールの共有

・自分が覚えている思い出の授業

～マッチングゲーム～

17:35 学生－教職員間交流

【前半】

・教職員のスケジュール

【後半】

・授業の作り方

・好きな授業

18:30 共有タイム

司会者インタビュー

18:50 閉会

もらい、グループ編成を乗り切りました。

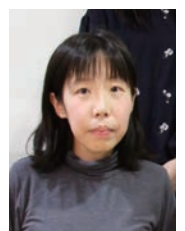
学生企画委員の意見と、CRED教職員の方々のアドバイスで交流会が完成したけれど、誰か一人でも欠けていたら会は全く違うものになってしまっていたと思います。学生CREDの集まりはいつでも安心感があります。それは私達が学生企画委員として加わる前から活動していた、4名の初期メンバーが作ってくれたものだと思います。

また、私達のチームには、学生CREDの総合リーダーが居てくれました。限られた時間でミーティングが成り立ったのは、彼女のおかげです。私は、いくつもの事を両立していく彼女の姿に勇気と希望を見出しました。

開催に関わった全ての方に感謝致します。

大橋 貴子(おおはしたかこ)

服飾美術学科3年





プログラム

- 15:15 開会
- 15:20 交流
・自己紹介
・テーマトーク
「授業」
「学生生活」
「就職」
「大学周辺のおすすめスポット」
- 16:25 グループ替え
- 16:30 レクリエーション
・自己紹介
・意識合わせゲーム
- 17:00 閉会

第1回

クリスマス交流会

2017年12月21日(木) 15:15~17:00 / I62D 講義室

参加者 学生16名、教員1名、職員3名

2017年12月21日に、学生 CRED 企画「クリスマス交流会」を開催いたしました。本交流会は「学生同士のつながりを作りたい」という学生 CRED メンバーの思いから企画され、学生生活に関するテーマトークと、クリスマスに合わせてレクリエーションを行いました。参加した学生の皆様からは「楽しかった」「参加して良かった」というお声をいただくことができ、企画チーム一同、開催して良かったと感じております。

しかしながら本企画の成功に至るまでに、これまで以上に多くの課題がありました。私は学生 CRED 立ち上げメンバーの一人として活動して参りましたが、今回初めて「失敗するかもしれない」という強い危機感を持ちました。学生 CRED の内と外のそれぞれに課題が見え、次につながる収穫の多い企画となりました。

8月に学生 CRED が正式に承認され、メンバー全員で話し合った結果、「学科内で学年を越えた縦のつながりを作る機会が

求められているのではないか」という意見が多く、当初は「学科内交流会」として企画がスタートしました。ここでまず外の課題として、開催時期の問題がありました。3年生の就職活動の本格化、4年生の卒業論文の提出と時期が重なってしまったのです。このため特に上級生の参加希望者が非常に少なくなってしまいました。また参加を希望する学生の学年の偏りのほかに、学科の偏りもありました。これは広報活動が不十分であるために学生 CRED の認知度が低い、情報発信の方法が現状限られている、という広報の課題によるものではないかと考えています。様々な学年・学科を巻き込んだ催しを行う難しさを実感しました。

内部の課題としては、学科によって独自の説明会や実習があり、学生 CRED メンバーも企画に参加できないという状況が生じました。さらに組織内の意思決定と情報共有の課題があったように思います。最後にはチーム全員が「企画を成功させた

い！」という思いを共有できていましたが、今後の活動に向けて組織体制をしっかりと構築する必要があると強く感じました。

このような経緯を経て、「クリスマス交流会」として開催することができました。今回見えてきた課題を確実に次の企画や来年度の活動に生かしていきたいと思えます。そして、私たち学生 CRED が、学生自身が、この家政大でできることが確かにあると感じられた一年となりました。最後に、参加して下さった学生の皆様、いつも様々な面で私たち学生 CRED を支え、見守ってくださる CRED 教職員の皆様、そしてこの企画を最後まで投げ出さず、諦めずに一緒に成し遂げてくれた学生 CRED メンバーにこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

吉井 芙樹乃(よいいふきの)
教育福祉学科3年



manaba利用の実態

統計情報から見える平成29年度manaba利用状況(11月末時点)



manaba について

本学では今年度教育支援システムmanaba(マナバ)を導入しました(今年度はe-kaseiと並行運用)。manabaには資料の掲載、課題の提出、小テスト等の機能があります(図1参照)。また、responというスマートフォンのアプリを使用した授業中の出欠確認、リアルタイムアンケートの実施も可能です(図2参照)。

manabaでは1つの授業を「コース」と呼び、学生はmanabaにアクセスし、自分が受けている授業のコースに参加します。インターネット回線に接続できればいつでもどこでもコースに入ることができるので、学生は学内外の場所を問わず、PC・スマートフォンを使用し、授業時間外における授業の予習・復習、課題の提出、小テストの回答といった学修を進めることができます。

manaba の利用状況

manabaの利用状況を測る上でいくつかの統計情報がありますが、今回はログイン

数、PV数(manaba内のページ閲覧数)、コース数を取り上げます。

平成29年4月～11月におけるログイン数は約19万7千回、PV数は約97万回で、1回のログインあたり4ページアクセスしていることとなります。登録コース数は273で、正課の授業に加え、学科における導入教育、事務部門における学生向け講座等、正課外の用途においても活用されています。後期授業開始後も新規利用が進んでおり、図3に示すとおりPV数も増加傾向にあります。

次に、manabaにおいてどの機能がよく使用されているか、機能別のPV数を図4に示しました。コースコンテンツ(資料の掲載)が最も多く、次いで小テスト、アンケート、レポートがよく使用されています。また、PV数は少ないですが、掲示板を使用したグループ学習の好事例も出てきております。

今後はより多くの教職員の皆様に使用して頂けるよう、講習会開催・事例紹介と

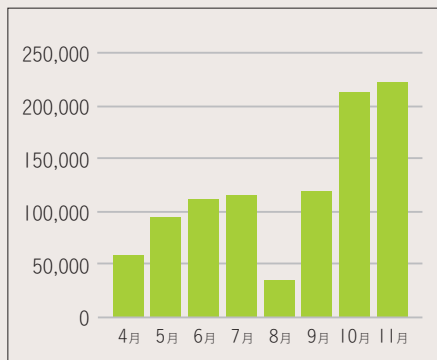
いった利用促進活動を継続し、問合せ対応・授業立会い等のサポート体制も万全にしていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



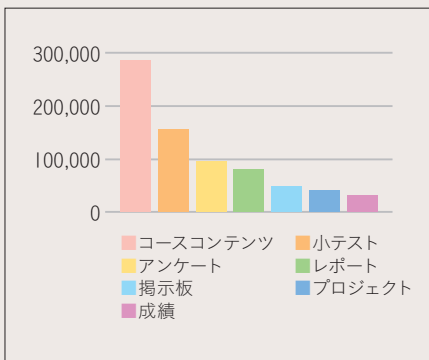
【図1: manabaコース画面】



【図2:リアルタイムアンケート画面(respon)】



【図3: manaba月別PV数】
(平成29年4月～11月推移)



【図4: manaba機能別PV数】
(平成29年4月～11月合計)

Report Part 1



安積 和広
(あづみ かずひろ)

学修・教育開発センター

manaba活用事例

わたしのmanaba活用法

9月に開催されたmanaba講習会に出席して以来、今年度後期からは、ほとんどの授業（ゼミ除く）でmanabaを利用させていただいています。授業によって多少異なりますが、私は主に、①出席の確認（respon）、②授業内での課題の提出（responまたはアンケート）、③授業内で使う資料、参考サイトや参考PDF等の配布、④授業前課題の提出（respon）、⑤欠席課題の提出（レポート）、⑥欠席者向けの授業録画の配布、に活用しています。

便利だと思えるところは多々あります。例えば学生の意見や知識を聴取する課題などでは、responを利用することによって、学生毎の過去からの書き込みがExcelで一覧となって管理できることです。またそれを、出席状況や課題の提出状況、テストの得点等の情報とリンクした形で、学生の理解度や考えについて集計・分析できるところです。この機能はe-kaseiのときから活用していましたが、授業内容の振り返りや説明の方法等を自分自身で考え直したり、学生について理解を深めることにとても役に立っています。

今年度は、急ぎmanabaを使い始めた側面があるので、まだ十分に活用できていないと感じています。来年度以降は、授業後に復習できてテスト対策等にもなる演習問題の提示を行いたいと思っています。少しでも、学生の授業と授業外学習の充実につながればと考えています。

Report Part2

平野 順子
(ひらの じゅんこ)



本学保育科准教授（家政学研究室）。
平成23年本学着任 / 研究分野：家族関係学 / 担当科目：家族関係学、家政学原論、生活経営学、ジェンダー論、家庭支援論、キャリアデザイン、他 / 主な著書：『新しい家族関係学』（建帛社、共著）、『家庭支援論』（ミネルヴァ書房、共著）など

manaba活用事例

manabaで感じたスマホ世代の学修スタイル

LMS（Learning Management System）の基本機能部分のみの利用ですが、資料配布とレポート課題提出管理機能をすべての講義及び演習科目で毎回利用しています。

学生用パソコン設置教室の演習授業では、全員が配布資料を教室内のPCかスマホでその場で見て演習に取り組むことができ、印刷物配布が不要になりました。不思議なことに、資料を小さなスマホ画面でわざわざみる人が多々います。スマホ世代の特徴かもしれません。課題実施の速度は学生毎に異なる為、電子的な資料配布の結果、実施進度の早い学生が効率的な学修をできるようになりました。

一方講義室での講義では、スマホで資料を見ながら参加する学生は少なく、スマホを用いたclicker的な使い方を試すには到っていません。授業スライド等のコンテンツ自身をスマホ対応にしたインタラクティブ化が、演習以外の講義科目では必要であると感じます。

manabaを利用したレポート提出の際は、スマホからの提出が多く学生にとり身近な機器が利用でき便利である反面、レポート作成をLINEと同感覚で実施していると感じます。後期授業では文字数指定等深く考える要素導入を試みていますが、スマホ世代対策はまだ検討が必要です。さらにLMS利用の際は締切日設定が重要だと感じました。前期の反省を踏まえ、後期は期限後提出を不可設定にした結果、平均的な期限内提出率とレポート内容とが向上しました。レポートの中に質問を記入する学生もあり、UX改善の余地を多々感じますが、学生から教員への個別質問の敷居がスマホ世代には下がる効果がありそうです。

Report Part3

小池 新
(こいけ あらた)



本学英語コミュニケーション学科准教授（知能情報コミュニケーション研究室） 博士（工学）
日本電信電話株式会社研究所、ワシントンDC事務所勤務等を経て平成29年本学着任 / 研究分野：情報ネットワーク、情報学。国際標準化や国際会議運営等の社会貢献活動にも従事 / 担当科目：情報概論、プログラミング演習等

平成29年度 研究会・講習会実施報告



CLILの方法論と実践 講演会

平成29年6月15日(木)

執筆: 並木有希
英語コミュニケーション学科

平成29年6月15日(木)に外国語での教授法に関するFDの講演会「CLILの方法論と実践」を実施しました。CLILとは、Content and Language Integrated Learning(内容言語統合型学習)の略語で、内容(教科・時事問題・異文化理解などのトピック)と言語(外国語)の両方を学ぶ新しい教育方法です。学内外から多数の参加があり、講師の素晴らしいパーソナリティと豊かな内容で大変な好評を得ました。実施にあたっては、太田学科長をはじめとして、英語コミュニケーション学科教員に全面的協力をいただきました。

CLILまたはCBL(Content Based Language Learning)という教授手法は、近年英語教育に導入され、日本でも徐々に定着しつつあります。英語教育のみならず、アクティブラーニングの実践・教授法としても役に立つ内容とするため、同教授法の嚆矢、上智大学和泉伸一先生をご推薦いただきました。筆者は、上智大学にて開催のセミナー「外国語教育におけるCLILの実践と応用」に参加し、ヨーロッパや日本での実践例を交えながらの説明およびデモレクソンを体験して、本学でも取り入れ生かすべき教育

法だと強く感じました。また、今回は、初めての試みとして、イベントについて学外へも広報を行ないました。本学を進学先とする高校の教諭などにも声かけが届き、大学広報および地域貢献の機会ともなったと考えます。

当日は、英語コミュニケーション学科長大田先生のご挨拶ののち、和泉先生のリードで、基礎的理論の紹介と『コミュニケーション』を例としたデモ授業を行いました。学習者の理解のU字曲線を踏まえ、興味関心に寄り添った教材作りで学習者の学習意欲が大きく伸びることを学びました。講師から事前に「ハンドアウトの事前配布無し」という要請がありましたが、先への興味が持続するあつという間の90分でした。講義の内容をタスクで確認するのではなく、先にタスクを与えて学生の知りたい気持ちを引き出してからの知識伝達を大切に教授法に、アクティブラーニングの真髄を見た感があります。大部分が英語で行われましたが、「楽しかった」「このような授業をうけていれば英語が嫌いにならなかった」という感想が頻出し、英語教員として襟を正す部分がありました。

外部講師から毎回指摘されることですが、東京家政大学は魅力的なコンテンツを多数持ち、教授法や情報発信に英語を取り入れることで、大きく伸びる余地があります。教授法を工夫することで社会人や留学生などにも発信できます。家政大の魅力を最大限生かすため、今後とも様々な外国語FDの機会を提供していきたいと思ひます。

平成29年度 第1回SD講演会 マネジメント改革、3P・教育の 質向上、SD義務化を考える

平成29年7月19日(水)

執筆: 保坂克二 総務部

「大学設置基準等の一部を改正する省令」(平成28年文部科学省令第18号)が平成28年3月31日に公布され、新たに第42条の3として「大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修(第25条の3に規定するものを除く。)の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする」と定められ、平成29年4月1日から施行されました。また、留意事項として、①職員には教授等の教員も含まれること、②SDを計画的・組織的に決めることなどが挙げられ、大学ガバナンス改革の一つとして議論されてきた「SDの義務化」が大学に求められることとなりました。

また、平成29年度の私立大学等改革総合支援事業では、「SDの実施方針・計画を全学的に策定し取組を実施しているか」が問われ、①3ポリシーの自己点検・評価と内部質保証に関するもの、②専門的教職員の育成に関するもの、③大学改革に関するもの、④学生の厚生補導に関するもの、



⑤業務領域の知見の獲得を目的とするもの、から4つ以上実施で4点、3つで2点、それ以下は0点と配分され、素早い対応が求められています。

こうした中、4月5日に内部質保証委員会のもと学修・教育開発センターと人事課からなる「SD推進のための専門小委員会」が発足し、今年度のSD計画を立てることになりました。今年度は「東京家政大学の内部質保証を考える」をテーマに9月の教職員研究会や2月のリサーチウィークスでの部署別発表会に繋がるものとして、7月19日に桜美林大学の篠田先生をお迎えして「マネジメント改革、3P・教育の質向上、SD義務化を考える」と題した講演会を行いました。内容は、①ガバナンス、マネジメントの一体改革と実効性のある中長期計画、②3つのポリシー義務化、教育の質向上と教学マネジメントの確立、③定員割れを乗り越える力は何か—地方大学の奮闘から学ぶべきもの、④SD義務化をどう読むか—中教審からのメッセージを読み解く、というもので教職員の現状理解と目標共有を図りました。当日は、講演前に今年度のSD計画の目的やスケジュール、方法などを説明し、研修の意義を教職員に理解してもらい効果が上がるよう努めました。次年度も同じように実施するかは未定ですが、事後アンケートでは概ね好評価を頂きましたので、今後に繋がりたいと考えています。



協同学習に目を向けませんか？ 講演会

平成29年7月27日(木)

執筆：及川郁子 保育科

近年、アクティブ・ラーニングが大学教育の重要なキーワードになっています（現在は「主体的・対話的深い学び」と呼ばれているようですが）。アクティブ・ラーニングにはさまざまな形がありますが、私はグループ学習を取り入れることが多く、自分の授業を振り返る機会と思い参加させていただきました。

協同学習は、「協力して学びあうことで、学ぶ内容の理解と習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の価値を学ぶ（内化する）ことが意図される教育活動」（関田・安永2005）であると定義されています。協同学習の目的は、協同の精神に基づいた「社会的営み」であると捉え、学習を個人の世界に閉じたものではなく、社会に開かれたものである。グループとなった仲間が、力と心を合わせて学びあうことで、個人の理解が仲間の視点から吟味され、その結果、多様な視点からの理解が深まり、複雑な様相を示す生活場面でも活用できる確かな知識が身につくと、説明されています。協同することの意義が、単に学ぶ内容の理解と習得に終わるのではなく、社会で生きるための協同の価値に学生が気づくことである、と再認識させられました。自分では協同学習を使っていると思っ

くの大学教師でも、実際には本質的な点を理解できていないということがある、と指摘されていますがまさにその通りでした。

協同学習を行うには、活動性を高める授業を意図的・計画的（構造化）に作らなければなりません。今回の講演の中では、その方法論についても教えていただき、いくつか実践的に学ばせていただきました。課題を明示し、個人で考え、その後グループで考え、全体交流を通して深める。やり方としては単純のようですが、学生がお互いの違いを認め合えるようなグループ編成や方法論を選択していくこと、継続的に学習を繋ぎ合わせながら協力と達成感を味わうことができるように仕組んでいくことなど、難しさも実感しながら自分の授業にどんな工夫ができるかと思いを巡らすことができました。

1・2年生を担当することが多い私にとって、協同学習の目的はやや遠いところにありますが、本来の協同学習を進めることは、本学の生活信条である*「愛情・勤勉・聡明」を具現化させることに通じるのではないかと気づく機会にもなり、その入り口にある学生とともに学んでいくことを楽しめるような授業づくりをしたいと思える有意義な時間をいただきました。

(*学生便覧より「自分を愛するがごとく他人を愛さなければならない。しかし、ただ愛情をもっているということだけではなく、形にあらわし、相手に尽す勤勉さがなければならない。さらに、勤勉と共に愛情の生活に求められるものは知性であり、物事を判断する聡明さが必要である」)



活動記録 2017.04-2018.03 (※3月は予定)

学修・教育開発委員会

- 2017年4月27日
 - ・第1回委員会(平成29年度CRED活動計画等)
- 2017年6月1日
 - ・第2回委員会(学生CREDの活動等)
- 2017年7月6日
 - ・第3回委員会(平成29年度教職員研究会等)
- 2017年9月7日
 - ・第4回委員会(東京家政大学スチューデントアシスタント等)
- 2017年10月5日
 - ・第5回委員会(平成30年度授業アンケート等)
- 2017年11月2日
 - ・第6回委員会(平成30年度授業アンケート等)
- 2017年12月21日
 - ・第7回委員会(平成29年度リサーチウィークス等)
- 2018年1月18日
 - ・第8回委員会(平成29年度リサーチウィークス等)
- 2018年2月15日
 - ・第9回委員会(共催によるFDイベントに関する件等)
- 2018年3月15日
 - ・第10回委員会(東京家政大学のFD等)

学修・教育開発センター会議

- 2017年4月20日
 - ・第1回センター会議(平成29年度CRED活動計画等)
- 2017年5月25日
 - ・第2回センター会議(学生CREDの活動等)
- 2017年6月29日
 - ・第3回センター会議(平成29年度教職員研究会等)
- 2017年7月20日
 - ・第4回センター会議(平成29年度教職員研究会等)
- 2017年8月30日
 - ・第5回センター会議(平成29年度教職員研究会等)
- 2017年9月21日
 - ・第6回センター会議(平成30年度授業アンケート等)
- 2017年10月19日
 - ・第7回センター会議(平成30年度授業アンケート等)
- 2017年11月16日
 - ・第8回センター会議(平成30年度授業アンケート等)
- 2018年1月11日
 - ・第9回センター会議(平成30年度シラバス第三者チェック等)
- 2018年2月8日
 - ・第10回センター会議(共催によるFDイベントに関する件等)
- 2018年3月1日
 - ・第11回センター会議(平成30年度CRED活動計画等)

行事

- 2017年4月4日
 - ・スタートアップ・エクササイズ2017年版(配付)
- 2017年4月10日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2017年4月11日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2017年4月13日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2017年4月14日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2017年4月19日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2017年5月18日
 - ・第一回新入生歓迎交流会(学生CRED企画・運営)
- 2017年6月9日
 - ・平成28年度後期授業アンケート結果活用報告書(発行)
- 2017年6月15日
 - ・「CLILの方法論と実践」講演会(企画・実施)

- 2017年6月22日
 - ・授業アンケート説明会(企画・実施)
- 2017年7月10日～8月5日
 - ・前期授業アンケート(実施)
- 2017年7月19日
 - ・平成29年度第一回SD講演会「マネジメント改革、3P・教育の質向上、SD義務化を考える」(企画・実施) ※狭山キャンパス中継
 - ・CRED通信07(発行)
- 2017年7月31日
 - ・CREDレター 08(発行)
- 2017年7月27日
 - ・「協同学習に目をむけませんか?」講演会(企画・実施) ※狭山キャンパス中継
- 2017年9月1日、4日
 - ・平成29年度教職員研究会(企画・運営) ※一部狭山キャンパス中継
- 2017年9月12日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施) ※狭山キャンパス実施
- 2017年10月10日
 - ・CREDレター 09(発行)
- 2017年10月20日
 - ・平成29年度前期授業アンケート結果活用報告書(発行)
 - ・前期授業アンケート集計結果(公開)
- 2017年11月2日～17日
 - ・大学IRコンソーシアム「学生調査」(実施)
- 2017年11月27日～12月16日
 - ・後期授業公開(企画)
- 2017年11月30日
 - ・学生と教職員の交流会(学生CRED企画・運営)
- 2017年12月1日
 - ・平成28年度教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発の成果報告書(発行)
- 2017年12月12日～2018年1月30日
 - ・後期授業アンケート(実施)
- 2017年12月21日
 - ・第一回クリスマス交流会(学生CRED企画・運営)
- 2018年1月11日
 - ・CREDレター 10(発行)
- 2018年1月19日
 - ・外国語FD「Engaging and enthusing: Motivating students to read」(共催)
- 2018年2月1日～3月31日
 - ・リサーチウィークス(実施)
- 2018年2月1日
 - ・平成29年度教育改革推進(学長裁量)経費予算による研究・開発の成果発表会(企画・運営)
- 2018年2月2日
 - ・東京大学FFPミニレクチャイベント(企画・運営)
- 2018年2月19日
 - ・東京家政大学研究フォーラム(運営)
- 2018年2月20日
 - ・部署別課題対応発表会1日目(共催)
 - ・CRED通信08(発行)
- 2018年2月21日
 - ・部署別課題対応発表会2日目(共催)
 - ・リサーチウィークスFDフォーラム(企画・運営)
- 2018年2月22日
 - ・部署別課題対応発表会3日目(共催)
- 2018年3月14日
 - ・manaba通信01(発行)
- 2018年3月20日
 - ・manaba操作説明会(企画・実施)
- 2018年3月28日
 - ・ポリシー共有・検討会(企画・運営)

出張歴

- 2017年4月21日
 - ・「CLILの方法論と実践」講演会事前打ち合わせ
 - @上智大学 四谷キャンパス: 並木有希
- 2017年4月28日
 - ・2017年度大学評価実務説明会
 - @立正大学品川キャンパス 石橋湛山記念講堂: 井上俊哉、宮東城
- 2017年5月10日
 - ・東京都私立短期大学協会 春季フォーラム
 - @私学会館: 宮東城
- 2017年5月12日
 - ・大学FD・SD学習会
 - @赤坂山王健保会館: 宮東城、矢野穂
- 2017年5月19日
 - ・教育ITソリューションEXPO
 - @東京ビッグサイト: 安積和広
- 2017年5月19日
 - ・明星大学(自校教育科目設立準備のため)
 - @明星大学 日野校: 井上俊哉、走井洋一、矢野穂
- 2017年6月7日
 - ・平成29年度私立大学等経常費補助金説明会
 - @文教学院大学 仁愛ホール: 矢野穂
- 2017年6月8日
 - ・平成29年度私立大学等経常費補助金説明会
 - @文教学院大学 仁愛ホール: 安積和広
- 2017年6月8日
 - ・manaba 新規導入事例セミナー
 - @朝日ネット セミナールーム: 井上俊哉
- 2017年6月9日
 - ・明星大学公開授業
 - @明星大学 日野校: 安積和広
- 2017年6月11日～12日
 - ・大学IRコンソーシアム第五回定時総会
 - @甲南大学 岡本キャンパス: 宮東城
- 2017年6月17日
 - ・創価大学 学士課程教育機構FDセミナー「LTD入門」
 - @創価大学: 井上俊哉
- 2017年6月20日
 - ・大学IRソリューションセミナー
 - @六本木ヒルズ 森タワー: 宮東城
- 2017年7月21日
 - ・新島学園短期大学(教職員研究会準備のため)
 - @新島学園短期大学: 安積和広
- 2017年7月27日
 - ・東京都私立短期大学協会 フォーラム小委員会
 - @東京都私立短期大学協会事務局: 宮東城
- 2017年9月9日
 - ・摂南大学アクティブラーニング研究会主催アクティブラーニングセミナー
 - @摂南大学 寝屋川キャンパス: 平山祐一郎
- 2017年10月6日
 - ・ALPSセミナー「インストラクショナルデザインを用いた教育・学修支援の可能性」
 - @千葉大学: 安積和広
- 2017年10月13日
 - ・「アンケート設計の基礎」研修
 - @早稲田大学 早稲田キャンパス: 矢野穂
- 2017年10月13日～15日
 - ・SDコーディネーター養成講座
 - @芝浦工業大学: 安積和広
- 2017年10月20日
 - ・大学IR実践セミナー
 - @富士ソフトアキバプラザ セミナールーム3: 宮東城
- 2017年10月27日
 - ・manabaユーザー会
 - @丸の内オアゾ: 安積和広
- 2017年11月20日
 - ・大学IR業務におけるデータ分析・活用ワークショップ
 - @六本木ヒルズ 森タワー: 宮東城

- 2017年11月22日
 - ・東京都私立短期大学協会 秋季フォーラム
 - @私学会館: 宮東城
- 2017年12月5日
 - ・大学IRコンソーシアムシンポジウム
 - @上智大学 四谷キャンパス: 宮東城
- 2017年12月10日
 - ・ヨコハマFDフォーラム
 - @横浜国立大学 教育文化ホール: 平山祐一郎
- 2018年2月16日
 - ・東京都私立短期大学協会 フォーラム小委員会
 - @東京都私立短期大学協会事務局: 宮東城
- 2018年2月26日
 - ・平成29年度大学評価シンポジウム
 - @アルカディア市ヶ谷: 井上俊哉
- 2018年3月8日、9日
 - ・学生FDサミット
 - @法政大学 富士見校他: 井上俊哉、矢野穂(8日のみ)

学科・科主体のFD活動

- 1) 児童学科・保育科
 - 児童学科・保育科の学修成果指標開発の準備
- 2) 英語コミュニケーション学科
 - 外部研修への参加を通じた大学教育に関わる課題発見と解決方法の検討
- 3) 看護学科
 - 学生のジェネリックスキルを育成する教育方法の検討

新規 & 追加購入文献

- 「大学を変える、学生が変わる」 木野茂、ナカニシヤ出版
- 「学習の輪 学びあいの協同教育入門(改訂新版)」 ジョンソン・D・W、ジョンソン・R・T、ホルベック・E・J、二瓶社
- 「協同学習入門 基本の理解と5Iの工夫」 杉江修治、ナカニシヤ出版
- 「先生のためのアイデアブック」 ジョージ・M・ジェイコブス、マイケル・A・パワー、ロー・ワン・イン、ナカニシヤ出版
- 「協同学習の技法 大学教育の手引き」 エリザベス・バークレイ、パトリシア・クロス、クレア・メジャー、ナカニシヤ出版
- 「活動性を高める授業づくり 共同学習のすすめ」 安永悟、医学書院
- 「課題解決型授業への挑戦」 伊吹勇亮、木原麻子、ナカニシヤ出版
- 「課題解決力と論理的思考力が身につく プロジェクト学習の基本と手法」 鈴木敏恵、教育出版
- 「学びを共有する大学授業」 島田博司、玉川大学出版部
- 「追手門学院の履歴書大学編～自分史を語る～」 追手門学院大学創立50周年記念事業事務局、追手門学院大学出版部
- 「インタラクティブ・ティーチング」 栗田佳代子、日本教育研究イノベーションセンター、河合出版
- 「自分～私がわたしを創る～」 水原克敏、東北大学出版部
- 「LTD話し合い学習法」 安永悟、須藤文、ナカニシヤ出版
- 「大学戦略経営の核心」 篠田道夫、東信堂
- 「学生参加型の大学授業」 D・W・ジョンソン、R・T・ジョンソン、A・スミス、玉川大学出版部
- 「戦略経営III大学事例集」 篠田道夫、東信堂
- 「大学IRスタンダード指標集 教育質保証から財務まで」 松田岳士、森雅生、相生芳晴、姉川恭子、関東地区IR研究会、玉川大学出版部

2017年度、CREDは以下のメンバーで活動しました

所長	井上俊哉(心理カウンセリング学科)
副所長	平山祐一郎(児童学科)
参事	走井洋一(児童教育学科)
	大西淳之(栄養学科)
	佐藤隆弘(児童学科)
専門委員	並木有希(英語コミュニケーション学科)
センター専任職員	宮東城
	安積和広
	矢野穂

2017 EVE ファッションショー



台風の接近により、EVE2017のファッションショーは、日曜日午後の開催が危ぶまれましたが、無事に6回の公演を行うことができました。雨の中、学園祭とは思えないほど静かで、少し寂しいキャンパス内でしたが、会場の多目的ホールの中だけは、多くの見学者がいらっしやって、熱気に満ち溢れたいつもの光景となりました。

最終回のエンドロールでは、半年以上の時間を費やした達成感とゴールを迎えた寂しさが相まって、ステージ上のモデルたち、またそれぞれの役割でショーの制作に携わってきたスタッフたちの目にも涙が溢れています。そしてそれを見守ってきた私の胸にも、今年も無事に終了した安堵感とともに熱いものが去来します。

EVEの活動は、そもそも純粹に学生の



自主的な活動として始まりました。私が東京家政大学に着任する前から、服飾美術学科の学生たちが学園祭でファッションショーを行っていたようですが、2003年度の3年生が中心となってEVEという団体をつくり、それぞれの役割を明確にし、対外広報活動を含めて組織的な運営を目指し、活動が始まりました。当初は私もアドバイスする程度の関わり方でしたが、年とともに関わりが深くなってきました。縦の繋がりも生まれて、次年度の学生に様々なノウハウが伝達されるようになり、また以前からモデルを中心に他学科の学生も加わっていましたが、今年はデザイン部門への他学科学生の参加もあり、300人規模の活動へと発展しました。今では学科企画として運営されていますが、教員はあくまで学生の自主的な活動をバックアップする立場であることは変わりありません。

家政大学の学生は受け身でおとなしいとよく評されますが、EVEの活動に限っては全く当てはまりません。活動全体のまとめ役の総合チーフが2人、そしてデザインや制作・舞台・演出など、セクション毎

のチーフとその構成メンバーという組織になっており、それぞれに活動計画づくり、10月末の緑苑祭を目指して4月から具体的な活動をスタートさせます。スケジュールリング、対外折衝、チーム内での打ち合わせなど、実際の企業活動にも似たことを学生たちは自主的に進めていきます。EVEの活動を通じて、スケジュール管理の大切さ、チームで作業を円滑に進めるために必要なこと、連絡や確認の重要性、企業とのコミュニケーション、そしてねばり強い姿勢が結果に反映されること等、教室内ではなかなか学べないことを経験しています。EVEの活動が終わると3年生の関心事は就職活動へと移りますが、企業に提出するエントリーシートに学生時代に頑張ったことの欄に、多くの参加学生がEVEの活動を取り上げています。このことから大学生活の中でいかに大きな比重を占めていたかを推察することができるでしょう。



古川 寛(ふるかわひろし)

本学服飾美術学科教授。(ファッションデザイン研究室)
慶應義塾大学 法学部 政治学科 卒業 法学士。服飾の専門学校卒業後、約25年間デザイナーとして勤務 / 2000年本学着任 / 研究分野: 日本のファッションビジネス / 担当科目: アパレルデザイン論、アパレル企画論、アパレルデザイン実習Ⅰ・Ⅱ